

史料にみる明治前期の栃木県産石材 —大谷石と徳次郎産石材との関係に着目して—

高山 慶子（宇都宮大学）

1. はじめに

大谷石は宇都宮市大谷町周辺で採掘される石材としてよく知られている。その大谷石について、「旧城山村荒針・旧国本村新里・同岩原・旧富屋村徳次郎は古くからの採石地」¹⁾、「宇都宮市西北郊外の旧城山村荒針を中心に、旧国本村新里、同岩原、旧富屋村徳次郎の地域に産出する凝灰岩質の石材」²⁾などと説明されるように、大谷石の採石地には旧城山村荒針（現在の宇都宮市大谷町）だけではなく、旧富屋村徳次郎（現在の宇都宮市徳次郎）も含まれている。

この徳次郎で産出される石材について、「徳次郎石は、宇都宮市富屋地区の徳次郎山（田中山などとも呼ばれる）から産出される凝灰岩」³⁾であるとして、大谷石とは別に「徳次郎石」とされている。この「徳次郎石」のほかにも、採石地や岩質によって「田下石」「桜田石」「戸室石」などの名称を有する石材もあり、現在の「大谷石」はそれらの総称である⁴⁾。しかし大谷石の高い知名度に比して、「徳次郎石」をはじめとする多様な石材の存在やその名称はあまり知られていない。そこで本稿では、大谷石と徳次郎石との関係を、石材の名称に着目して検討する。

大谷石をめぐる研究については、石材の特性や大谷石を用いた建造物に関する分析は多くの蓄積を有するが、古文書などの史料にもとづく歴史研究は少ない⁵⁾。以下では、大谷石に関する数少ない古文書の一つである明治前期の旧江戸町名主宛の書簡を起点に⁶⁾、分析を進める。

2. 明治12年（1879）の仲田信亮の書簡

東京都江戸東京博物館には、江戸の名主であった馬込家に伝来した古文書が所蔵されている⁷⁾。その馬込家文書のなかに、栃木県の官吏であったとみられる仲田信亮が、明治12年（1879）8月17日から9月11日にかけて、東京の馬込惟長に宛てた5通の書簡の写しがある⁸⁾。一連の書簡は、石材の需要が高まる東京で栃木県産石材を販売しようと模索する中で取り交わされたものである⁹⁾。

大谷石（一通目、8月17日付け、14頁掲載の写真1参照）

一、大屋石は河内郡荒針〔針〕村字大屋ト申所より産出、其適用ハ第一石蔵・石室及ヒ屋根ニ用ヒ、水火ニ至而丈夫、先年或ル西洋人宇都宮通行之砌り、石蔵ヲ熟覽、練〔煉〕瓦より遙カニ優ルト申候由、又曾而地理局官員白野夏雲ト云人、河内郡巡廻之砌、大屋石ヲ一見いたし、建築石ニは全国第一等之石質ト賞誉致シ候由、石産出之場所は隣村駒生村立岩新田江跨り候大山ニ付、当分何程切出シ候テモ容易に切尽シ候様之儀無之、東京運搬は石井河岸江陸路三里半、同所より船積絹川〔鬼怒川〕通り、右大谷石幸便有之、山元より取寄申候間、不日通運継ヲ以御廻送致候条、其質篤と御熟覽可被成、且東京深川材木町（油堀ノ際）元宇都宮藩買上地中に大谷石ヲ以建築いたし候石蔵有之候旨伝承候間、御心得ニ申上候条、御聞糺シ有之度候

この書簡では、大谷石は河内郡荒針村の大谷で産出される石と説明されている。石蔵や石室および屋根に使用され、水や火に極めて強いという。この記述より、明治12年頃には大谷石の名称が使用され、その大谷石は荒針村産出の石であることを確認できる。

仲田の書簡では、大谷石の他にも以下の石材の名称を確認できる。

板橋石（二通目、8月20日付け）

（前略）上都賀郡板橋宿より（旧例幣使街道則栃木日光道ナリ）美質之建築石産出、右一昨年栃木下町江新築相成候警察署は則板橋石之趣、昨日始メテ承知（板橋石之見体甚伊豆石ニ類似いたし居候ニ付、^{（マ マ）}小生是迄伊豆石ヲ相用候事とのミ相心得居申候）、幸ヒ栃木町石屋板橋石ヲ所持いたし居候間、則今便大谷石一同通運継ヲ以御廻し申上候、此板橋石は全ク近年之産出ニて、栃木江売出シ候は右警察署新築之砌初メテ申事、小生愚案ニは、大谷石ヨリハ遙カニ相優り居り候様相考申候、板橋石モ山元中々ナル大山之趣、東京運送は板

橋より栃木江七里、夫より船路之方便利と存候、鹿沼宿より式里余日光寄ニ候間、石井河岸江も同様七里余有之申候、利根之逆流無之丈ケ栃木之方よろしくと相考申候、右は御申越之如ク御買上ケ代価、豆・相兩國之比較ヲ以、当方切歩、河岸出し、船ちん等、篤と御計算有之度、右荒針・板橋共山元之処は、小生及ヒ候丈ケハ如何様ニも尽力御世話可申上、先は板橋石発見之儀及ヒ通運継ヲ以差出候儀申上旁御報如此御座候也

板橋石は、例幣使街道の宿場である板橋宿（現在の日光市板橋）で産出される美しい建築石とされている。仲田は板橋石のことを、この書簡を認めている前日（8月19日）（「昨日」）に初めて知ったという。栃木では明治10年（1877）（「一昨年」）に新築された警察署で使用されたのが最初であるが、板橋石は伊豆石によく似ているため、仲田はこれを伊豆石と思ひ込み、板橋石であることに気がつかなかったという。仲田の記事に従えば、板橋石は明治以降に新たに産出されるようになった石材である。

岩船石・磯山石（三通目、8月27日付け）

（前略）本月廿一日通運ヲ以差出候大谷・板橋之両石塊、廿四日貴家着、差向石工江御見セ相成候処、大谷石ハ先ツ豆州ノ中等、板橋石ハ其質豆州之上ニ位スベキナレドモ、青緑薄ク候ニ付、先ツ沓等劣り、右ニて色濃ニ候ハ、建築第一等、豆・相ノ上ニ居ルヘキ鑑定、何れ其筋御検査済之上は、猶評細被仰下候旨、逐一承知仕候、右板橋は山元広大ニ付、其色は濃淡種々有之、此程御廻送仕候分ハ其中辺ニて、右より猶濃キモ薄キモ有之候由、石工之者申聞候間、御安心被下度、弥御検査済、直段も御見込ニ相合シ盛ンニ御廻送之事ニ候ハ、仰之如ク其地之石類取扱候者江御談判相成候方、至極御便利と相考申候、弥其節に至り候ハ、必ス着実之人物御世話可申上候

廿二日附御端書ニ被仰越候堅石、管下産出之内下都賀郡^{シツカ}静村ニて岩船石（本文岩船山は下都賀郡より安蘇郡江跨り四隣五六ヶ村江連絡いたし居候大山ニて、夫より産出候ニ付、岩船石と唱申候）同郡真弓村^{マユミ}之磯山石両様共土台及ヒ石垣等ニ適用、且東京江差出し候に川路便利ニ付、則右両石共取寄、今廿七日通運ヲ以御廻し申上候間、着御改メ御受取有之度候

岩船石 但（産出之山下都賀郡静村外四ヶ村ニ跨ル）

右山元より安蘇郡馬門河岸迄里程凡三里余、夫より東京迄船路

但、馬門河岸之下渡良瀬江出、夫より利根川

磯山石 但（産出之山下都賀郡真弓村之内）

右山元より沓里余ニて本沢河岸、又沓里半余ニて部屋河岸、夫より船路

但、本沢・部屋両河岸トモ巴川^{ウツマ}ニて則栃木河岸之下流ニ御座候

引用箇所の前半部分では、先にみた大谷石と板橋石に関する石工の鑑定結果が記されている。大谷石は伊豆石の中等、板橋石は青緑色が濃ければ伊豆石の上位で建築第一等の石材、という評価である。青緑色の濃淡が石質の評価に関係した点には注目しておきたい¹⁰⁾。

そして引用箇所の後半部分で、岩船石と磯山石が登場する。岩船石は下都賀郡静村（現在の栃木市岩舟町静）、磯山石は同郡真弓村（現在の栃木市大平町真弓）で産出される安山岩（「堅石」）である。舟運による東京への出荷が便利であるため、仲田は両方の石を取り寄せて惟長に送ると伝えている。

仲田が書簡で石材の名称を記したのは以上の4種類である。これらのうち、大谷石は「石産出之場所は隣村駒生村立岩新田江跨り候大山」、板橋石は「板橋石モ山元中々ナル大山」「板橋は山元広大」、岩船石は「岩船山は下都賀郡より安蘇郡江跨り四隣五六ヶ村江連絡いたし居候大山ニて、夫より産出候ニ付、岩船石と唱申」「産出之山下都賀郡静村外四ヶ村ニ跨ル」とあり、いずれも採石地が広大な山であったと指摘できる。磯山石については不詳であるが、それ以外の名称が付いている石は、採石地が大きな山であることが特徴としてあげられる。

一方、仲田は9月6日付けの四通目の書簡で、大谷と板橋の近辺に品質の異なる石の産地が3～4箇所であると述べている（「大谷・板橋之近傍猶夫々品替り候石三四ヶ所有之」）。そして、続く同月11日付けの五通目の書簡では、河内郡古賀志村（現在の宇都宮市古賀志町、鹿沼市古賀志町・高谷）と上都賀郡塩山村（現在の鹿沼市塩山町）をそれらのうちの2箇所としてあげている。ここに徳次郎は含まれていないが、大谷・板橋周辺には複数の石の産地があり、そこで採れる石は大谷石・板橋石とは品質の異なる石（「品替り候石」）と認識されていた点に注目しておきたい。

3. 明治12年以前の徳次郎産の石材

徳次郎で石材が産出されたことは、明治以前の記録で確認できる。

(前略) 徳次郎三宿の産物、にんじん、牛蒡、葱、干瓢、ならひに白き石を出せり、其質軟脆にして堅実ならず、宇都宮宿・小山宿などにて堂社又ハ土蔵の屋に用ゆるものなり、道より左雁行山・伝法寺山よりきり出す、其職人ハ西根・田中・門前の三村に住すといふ

これは天保14年(1843)頃に記されたと推定される「日光道中略記」の一部である¹¹⁾。徳次郎宿の産物として「白き石」があげられており、これが徳次郎石に相当すると考えられる。この頃には徳次郎で白い石が産出され、徳次郎の名産となっていたことが知られる。

明治7年(1874)には、栃木県令の鍋島幹が内務卿の大久保利通に「建築石取調」の調書一冊を提出した。そこには全28箇所の産地が書き上げられているが、徳次郎産の石材は14番目に以下の通り記されている¹²⁾。

字山越入公有地産出	下野国河内郡徳次郎宿
一 切石 税金無之 但請負年季無之	稼人
一 質 軟ク色白シ	同宿 入江 清吉
一 発掘年月不相分	池田 善吉
一 功能 作用共 能ク火氣・寒氣ニ勝エ、宮 社・碑石・土台・倉庫・屋 根ニ作用ス	細田菊三郎 外 三人
一 現今産出 四百駄 但一駄ニ付平均長三尺巾一尺石三枚	
一 現今売買相場 一駄ニ付金五十銭	
一 運輸津出シ 河内郡石井川岸へ平地四里半	
一 輸出仕向之土地 河内郡宇都宮町	

産地には、字名と官有地・公有地・民地の別が記されている。徳次郎産の石材については、産地の字名が山越入、土地の種目は公有地である。各項目で石材の特徴・現況がまとめられているが、ここでは特に河川舟運での発送地(「運輸津出シ」)が石井河岸¹³⁾、域外への発送地(「輸出仕向之土地」)が宇都宮町である点に注目しておく。

これに対して、荒針村産出の石材は上記の徳次郎から10箇所後の24～28番目に、以下の通り5箇所まとめて記されている。

字屏風岩民地産出	同国同郡荒針村
一 切石	
字盗人ヶ入民地産出	同村
一 切石	
字瓦作民地産出	同村
一 切石	
字立岩民地産出	同村
一 切石	
字北戸民地産出	同村
一 切石 五ヶ所合税金六十九銭二厘 但請負年季無之、雑税中石 取税之名義	稼人 同村 渡辺 良平 他二十二人
一 質 軟ク色白	
一 発掘年紀不詳	
一 功能 作用共 前同断 ^{※注1}	
一 現今産出 千八百駄 但前同断 ^{※注2}	
一 現今売買 一駄ニ付金五十銭	
一 運輸津出シ 河内郡石井川岸へ平地三里	

一 輸出仕向ノ土地 河内郡宇都宮町

※注1：「能ク火気・寒気ニ勝ユ、竈・七輪・倉庫ニ用ユ」(字内山民地産出)

※注2：「一駄ニ付平均長三尺巾一尺石三枚」(字山越入公有地産出)

徳次郎産と荒針産の石材は、順番を隔てて記されており、両者は別の石材として書き上げられている。両者を比較すると、産地（徳次郎宿は1箇所、荒針村は5箇所）、稼人（徳次郎宿は6人、荒針村は23人）、産出量（徳次郎宿は400駄、荒針村は1800駄）のいずれをみても、徳次郎は荒針よりも小規模な産地といえる。その一方で、荒針産石材（大谷石）の発送地は石井河岸・宇都宮町で、徳次郎と同じである。両者の石は同じ場所に集荷され、域外に出荷されたのである。

4. 大正8年（1919）の宇都宮大谷石材採掘問屋組合の結成と大谷石材株式会社の起業

大谷石は、明治29年（1896）に宇都宮軌道運輸会社が設立され、採石地と鉄道駅が人車（軌道上の車両を人の力で押して貨物や乗客を運ぶ車両）の運行でつながったことにより、輸送力が格段に強化され、生産・販売が拡大した¹⁴⁾。それに呼応するように、同32年（1899）には宇都宮石材問屋組合が創立され、大正2年（1913）の宇都宮市石材問屋組合を経て、同8年（1919）に宇都宮大谷石材採掘問屋組合となった¹⁵⁾。その組合の規約は全56条からなるが、その一部は以下の通りである¹⁶⁾。

第一条 本組合ハ宇都宮大谷石材採掘問屋組合ト称ス

第二条 本組合ハ宇都宮市及河内郡ヲ地区トシ、河内郡城山村其ノ他河内郡内ヨリ産出スル石材ノ採掘販売問屋営業ヲ為ス者ヲ以テ組織ス

（中略）

第十九条 本組合員ハ左記看板ヲ店頭ニ掲グベシ

宇都宮大谷石材採掘問屋組合 印

（中略）

大正八年十月十日議定作製ス 印

宇都宮大谷石材採掘問屋組合員

宇都宮市石町四十五番地 組合長 鈴木源十郎

（副組合長、会計役、評議員6人省略）

河内郡富屋村大字徳次郎二、二五三 同〔評議員〕小堀貞吉

（以下、19人、2会社の署名省略）

新たな組合名には「大谷」の名称が加わっているが、組合員には河内郡城山村（同村内に大字荒針がある）だけではなく同郡の他村産出の石材を扱う問屋も含まれるとされている。規約末尾の署名者の中には、評議員の一人として富屋村の大字徳次郎の小堀貞吉を確認できる。組合員は「宇都宮大谷石材採掘問屋組合」と記された看板を店頭に掲げるとされており、徳次郎の業者が扱う石材も「大谷石材」として認識されるようになった可能性がある。

同年には、大谷石材の採掘販売、土木建築の請負、そして各種石材の販売を目的として、大谷石材株式会社も設立されている¹⁷⁾。同社の起業説明書には「大谷石は栃木県河内郡城山村及国本村・富屋村の数部落に産出し、而して本社所有に帰すべき部分は、其量に於て約七割を占め、其品質最も優秀にして他山の遠く及ばざる所なるを以て、実質上本社の独占と称するを得べし」¹⁸⁾とあり、大谷石の採石地は荒針のある城山村だけではなく、徳次郎のある富屋村にも及んでいることを確認できる。こうして大谷石の名称は、本来の荒針村産出の石材以外にも、広く使用されるようになったと考えられる。

5. おわりに

徳次郎で産出される石材は、本来の（狭義の）大谷石とは異なる石材で、固有の特性・歴史を有する。それが、圧倒的な生産量を誇る大谷石と集荷・出荷場所を同じくし、「大谷石材」の名称を有する組合に組織され、大谷石材株式会社による採掘販売がなされたことで、徳次郎産の石材も大谷石の一つとみなされるようになったと考えられる。

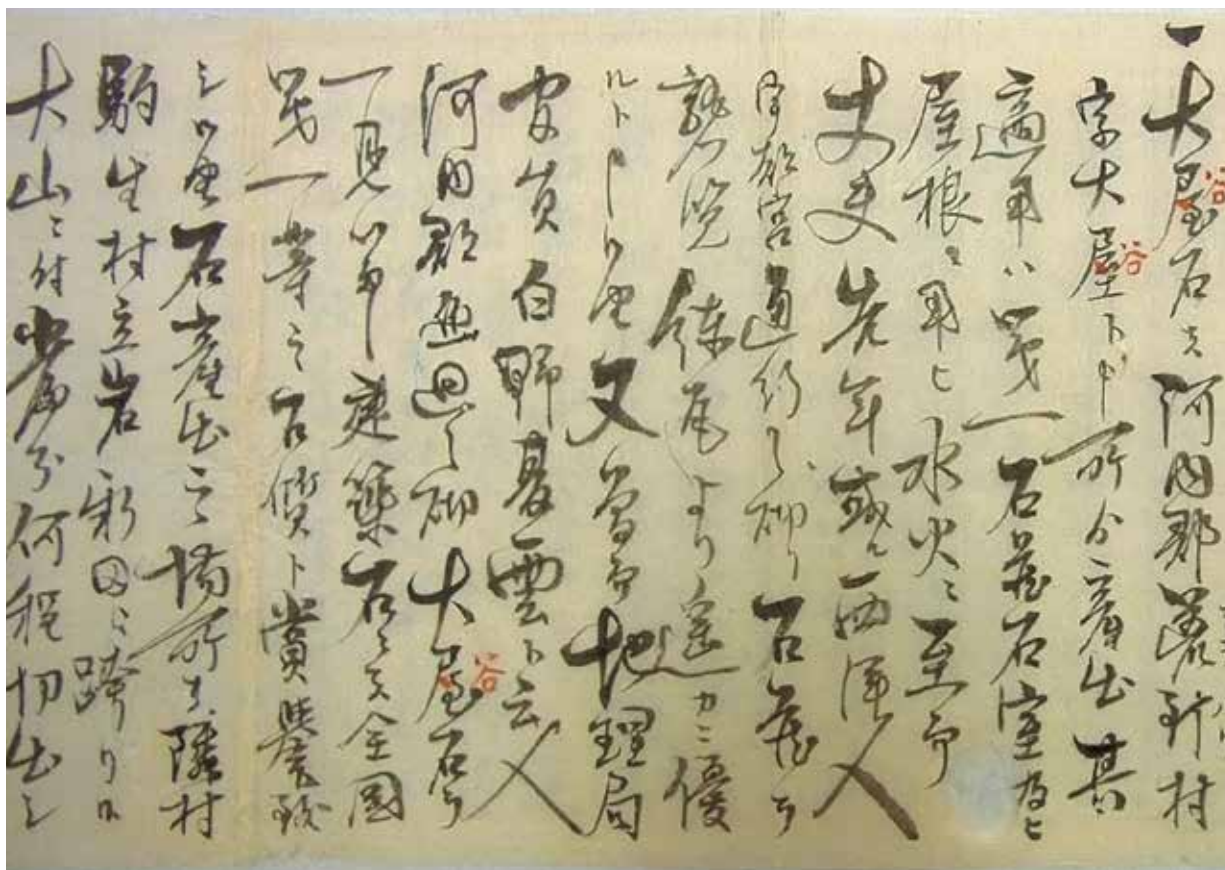
本稿では以上の見通しを得ることができたが、本稿で取り上げた史料では「徳次郎石」の名称を確認できなかった。「徳次郎石」の名称がいつ頃から使用されるようになるのか、また「大谷石」に加えて「日光石」¹⁹⁾との関係

はどのようになっていたのかなど、名称に関して検討するべき課題は少なくない。今後の史料の発見と研究の進展に期したい。

参考文献

- 1) 宇都宮市史編さん委員会編『宇都宮市史』近・現代編Ⅰ（宇都宮市、1980年）。
- 2) 栃木県史編さん委員会編『栃木県史』通史編7・近現代2（栃木県、1982年）。
- 3) 中川博夫・池田貞夫・中村洋一・吉田貴洋編著『徳次郎石研究会活動成果報告書』2019（令和元）年度（徳次郎石研究会、2020年）「はじめに」。
- 4) 同上。この報告書では「徳次郎石を含めて類似の凝灰岩を『大谷石』として扱う場合もありますが、これは『広義の大谷石』」で、「石産地ごとに扱うこともあり、この場合は狭義の岩石名となり、徳次郎石はこれにあたります」と説明されている。なお、水野順敏「栃木の石の産地」（NPO法人大谷石研究会編『大谷石百選』2006年）では、栃木県は石材産地の上に立地していると言っても過言ではないとして、以下の21件の石の名称が挙げられている。①大谷石、②田下石・桜田石、③長岡石・山本石、④徳次郎石、⑤深岩石・上日向石、⑥樅山石、⑦板橋石、⑧船生石、⑨中山石、⑩岩舟石、⑪芦野石、⑫中野石、⑬小砂石・小口石、⑭辻畑石、⑮中山石、⑯大金石、⑰大谷津石、⑱市塙石、⑲茂木石・高岡石・坂井石・大門石、⑳芦沼石、㉑大島石。これらのうち②が大谷石と同類とされている。
- 5) 加藤壮一郎「大谷石研究の年代の変遷—CiNii掲載論文からの一考察—」（大谷石文化学HP、宇都宮市大谷石文化推進協議会、2021年）。<https://oya-official.jp/bunka/culturestudies/industry-environment5/>（2022年1月閲覧）。
- 6) 高山慶子「栃木県官吏仲田信亮の旧江戸町名主馬込惟長宛書簡—大谷石などの栃木県産石材をめぐって—」（『宇都宮大学教育学部研究紀要』第66号第1部、2016年）。本論文は宇都宮大学学術情報リポジトリUUAIR（<https://uuair.repo.nii.ac.jp/>）で公開されている。
- 7) 馬込家文書については、東京都江戸東京博物館都市歴史研究室編『大伝馬町名主の馬込勘解由』東京都江戸東京博物館調査報告書第21集、2009年、同編『江戸の町名主』同第25集、2012年に詳しい。
- 8) 高山論文（前掲6）では、5通すべての書簡の全文が翻刻されている。惟長は、勘解由と名乗っていた十一代当主が明治以降に使用した名前である。
- 9) 書簡授受の背景や内容については、高山慶子『江戸の名主 馬込勘解由』（春風社、2020年）、同「明治前期における大谷石の東京市場開拓(1)(2)(3)」（大谷石文化学HP、前掲5、2021年）、<https://oya-official.jp/bunka/culturestudies/rekishi8/>、同rekishi9/、同rekishi10/（2022年1月閲覧）参照。引用に際して、割書は（ ）、引用者による注は〔 〕で示した。字句修正のふりがなは朱筆。
- 10) 徳次郎石は美しい白色が特徴とされるが、青緑色が薄いと一等劣るとされる当時の鑑定でどのように評価されたのかは不詳である。
- 11) 「日光道中略記」七（国立公文書館デジタルアーカイブ）。今井金吾監修『道中記集成』第16巻（大空社、1996年）には、国立国会図書館所蔵本の影印版が収録されている。池田貞夫「徳次郎石の採石と利用の歴史」（『徳次郎石研究会活動成果報告書』2019（令和元）年度、前掲3、2020年）参照。『道中記集成』の解題では、本書には寛政11年（1799）の年代記述があることから、それ以降の天保14年（1843）に実施された将軍の日光社参に随行した幕府高官による記録と推定されている。
- 12) 「栃木県史料」六（『栃木県史』史料編近現代六、97～102頁）。
- 13) 石井河岸は鬼怒川右岸に位置する河岸である。阿部昭・橋本澄朗・千田孝明・大嶽浩良『栃木県の歴史』（山川出版社、1998年）、栃木県立博物館『江戸とつながる川の道—近世下野の水運—』（栃木県立博物館友の会、2014年）など。
- 14) 『宇都宮市史』（前掲1）、『栃木県史』（前掲2）など。
- 15) その後も改組・改名を重ね、最終的には昭和24年（1949）の大谷石材協同組合に至るが、大正8年の宇都宮大谷石材採掘問屋組合は採掘業界最初の本格的な協同組合とされている。
- 16) 「宇都宮大谷石材採掘問屋組合規約」（『栃木県史』史料編近現代六、145～150頁）。
- 17) 『宇都宮市史』（前掲1）、『栃木県史』（前掲2）など。
- 18) 「大谷石材株式会社起業説明書・定款・予算」（『栃木県史』史料編近現代六、150～157頁）。
- 19) 徳次郎石は昭和39年（1964）から同49年（1974）まで日光石材株式会社が採石を行ったことから、「日光石」の銘柄で出荷された。池田論文（前掲11）参照。

写真1. 仲田信亮の馬込惟長宛書簡（写、部分、東京都江戸東京博物館所蔵「馬込惟長宛書簡綴（大谷石購入などにつき）」より）



(前略)

一、大屋石は河内郡荒釘村アヲハリ

字大屋谷ト申所より産出、其

適用ハ第一石蔵・石室及ヒ

屋根ニ用ヒ、水火ニ至而

丈夫、先年或ル西洋人

宇都宮通行之砌り、石蔵ヲ

熟覧、練瓦より遙カニ優

ルト申候由、又曾而地理局

官員白野夏雲ト云人、

河内郡巡廻之砌、大屋石谷ヲ

一見いたし、建築石ニは全国

第一等之石質ト賞譽致

シ候由、石産出之場所は隣村

駒生村立岩新田江跨り候

大山ニ付、当分何程切出シ

(後略)